

社員の意識改革に向けて コミュニケーションを活性化

全社が一丸となって目標達成に向かう組織づくりのため、社員の会社への帰属意識を高め、自分ごと化を促進することを目指した。第一歩として、社歴や立場にとらわれず率直に意見交換できる場を創出した。

取り組み内容

Step 1
現状把握
経営層の目指すビジョンと考えを把握するため、社長や幹部へのヒアリングを実施

Step 2
課題点の抽出
社員アンケートを通じて社員の抱えている課題や希望を集め、経営層にフィードバック

Step 3
交流の機会創出
ランチタイムに社員が意見交換を行う「なんでもいって委員会」を開催

Step 4
体制の構築
社員同士の活発な意見交換が継続可能な取り組みとなるよう、体制を整備

受入企業

佐藤鉄工 株式会社 代表取締役 坂本 良文 さん

1910年創業。橋梁や水門などの大型鋼構造物の設計、製造、施工を中心に、道路などの社会インフラの建設や保安を手掛けている。最新の溶接用ロボットや高強度の新素材といった最新技術を積極的に取り入れ、他社との差別化を図っている。また、廃材リサイクル用破砕機の製作など環境分野にも力を入れている。

協力研究員

入谷 隆治 さん

兵庫県出身。1981年に東レに入社し、営業職を経て、同社労働組合、同社厚生年金基金の職員などを経験。途中、神戸大学大学院に社会人入学し財務論を専攻。同社共済会事務局長や子会社の社長などを歴任して、2024年6月に定年退職。長年の対人折衝経験からコミュニケーション力とトラブル対応力を培い、社会保険や労務管理に関する知識も豊富。

真心込めてモノづくり
安全第一・確かな品質

富山“Re-Design”ラボ 事例

CASE:

社内の活性化と
一体感醸成で
ビジョン共有へ

取り組みの成果
・
今後の取り組み

- ・社内全体でビジョンを共有し目標達成へと向かう組織づくりにあたり、まずは現状把握が重要との考えから、社員アンケートを行い、潜在的な課題を可視化。
- ・社員7~8人単位でランチタイムに集まり、90分間かけて会社の課題や改善案を話し合う「なんでもいって委員会」を実施した。
- ・「なんでもいって委員会」が一過性のイベントで終わらないよう、引き続き社員の意見を拾い上げ、経営に反映していくための組織体制を整備していく。

🏢 受入企業の評価・今後の関わり方

参加理由

- ・事業の安定性に優れたインフラ産業においても、近年、市場の変化に合わせた柔軟な対応を求められています。社員と危機感を共有すると同時にエンゲージメントを高め、一緒に成長していくためのきっかけづくりができればと思い、応募しました。

評価（成果・社内変化など）

- ・社員の意識改革という難しいミッションに対し、入谷さんは時間をかけて社員との信頼関係を構築することから始めて、一人一人から貴重な意見を引き出してくれました。最もエネルギーのいる部分であり、力強く進めていただき感謝しています。
- ・入谷さんがスタートした取り組みは、長く継続することによってさまざまな変化を社内にもたらすと期待しており、そのための体制づくりを進めます。
- ・地方の中小企業では人材やリソースが限られる中、このプログラムは、外部から新たな視点を取り入れ、社内に新鮮な風を吹き込むことができる非常に良い機会だと実感しました。

今後の関わり方

- ・社内の意識統一の難しさは、会社が存続する限り何度も直面する課題だと思います。入谷さんに半年間かけて整備していただいた基盤を踏まえ、社員が力を合わせてどのような課題も乗り越えていける会社へとステップアップしていきたいと思っています。

👤 協力研究員の評価・今後の展望

参加理由

- ・定年退職後、地方移住を念頭にキャリアプランを考えていたところプログラムを知り、応募しました。過去の労働組合などでの経験で得た、会社全体を俯瞰して考える力や課題解決のためのコミュニケーション力を生かしたいという思いもありました。

評価（取り組み・生活）

- ・社員の皆さんが会社の将来について主体的に考え、業務を改善していく雰囲気醸成する第一歩として、意見を言いやすい場づくりを進めました。「より良い会社にしていきたい」という思いが、徐々に前面に出てくるようになってきたと感じています。
- ・佐藤鉄工は真面目に業務に励む社員が多く、多忙な中でランチミーティングへの参加をお願いするのは気が引けましたが、だからこそ充実した時間になるようにと全力で取り組みました。
- ・多様なバックグラウンドを持ち、向学心あふれる研究員たちとの交流は刺激的で、何歳になっても学ぶ姿勢を持ち続けたいという自分の思いを再確認する貴重な機会となりました。

今後の展望

- ・もし引き続きご縁があれば、会社のさらなる成長、発展に向けて力になりたいと思います。また、半年間の富山県住まいを通して地方の魅力にたくさん触れることができ、地域社会に貢献する生き方への関心も高まりました。